



Title	多声の景観：文化的多様性と汎対話性をめぐる試論
Author(s)	山村, 高淑; 張, 天新
Citation	Dialogical Field Studies, 1, 1-17
Issue Date	2026-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99467
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/
Type	journal article
File Information	20260331 yamamura & Zhang DFS Vol.1.pdf



Dialogical Field Studies
Vol.1

多声的景觀
——文化的多様性と汎対話性をめぐる試論

山村高淑・張天新

北海道大学観光学高等研究センター

2026 年 3 月 31 日

多声的景観 ——文化的多様性と汎対話性をめぐる試論

Multivoiced Landscapes: Toward a Pan-Dialogical Framework for Cultural Diversity

山村高淑（北海道大学 観光学高等研究センター 教授）
張 天新（北京大学 建築與景観設計学院 副教授）

本稿の目的は、筆者らが25年にわたり重ねてきた共同研究と対話の延長線上で形成されてきた二つの概念、すなわち〈多声的景観〉（Multivoiced Landscapes）および〈汎対話性〉（pan-dialogical）の理論的枠組みを、仮説的に提示することにある。

本稿は、JSPS 科研費 基盤研究 (B)「ツーリズムにおける異文化間コンフリクトと創造的対話に関する理論的・実証的研究」（課題番号：23K28329、研究代表者：山村高淑、2023年度～2027年度）ならびに、北海道大学先住民・文化的多様性研究グローバルステーション（GSI: Global Station for Indigenous Studies and Cultural Diversity）および北海道大学観光学高等研究センターにおける〈文化的多様性とツーリズム研究〉プロジェクト（2022年度～2025年度）の一環として取りまとめたものである。

本稿の作成にあたり、ご支援とご協力を賜った関係各位に、深く感謝申し上げます。

1. 〈多声的景観〉の仮説的定義——単一の物語を超えて

1.1 Polyphony から Multivoice へ

あらゆる景観には、先住民の営み、移住者の伝統、植民地支配の経験、戦争の記憶、近代的開発など、複数の歴史的層が刻み込まれている。これらの層はそれぞれ固有の物語を担い、ときに緊張し、ときに対話しながら同一の空間の中で共存してきた。どの層にも、多様な〈声〉が存在している。しかし現実には、特定の制度や社会的文脈の中で形成された強い物語が前景化されることで、他の〈声〉が可視化されにくくなる場合も少なくない。

そこで筆者らが注目したい概念が、“polyphony”（ポリフォニー＝多声性）である。「多声性」とは、哲学者・思想家・文芸批評家であるミハイル・バフチン（Mikhail Bakhtin）が提示した概念であり、互いに独立した複数の声が、それぞれ固有の視点や価値を保ったまま、従属関係に回収されることなく共存する状態を指す語である（Bakhtin, 1963/1984）¹。

¹ バフチンは、ドストエフスキー小説の特徴を説明する文脈において、polyphony について次のように述

しかし、polyphony の概念を、単に複数の〈声〉が並存する状態として理解するだけでは不十分である。重要なのは、それらの〈声〉が相互に作用し、交差しながら、新たな意味を生成していく点にある。本稿では、この「多声性」の視点を文化的景観の読解へと拡張し、景観を単一の支配的物語によって理解されるものとしてではなく、複数の主体と記憶が交差し響き合う場として捉える理論枠組みとして、〈多声的景観〉(Multivoiced Landscapes) を提案する。ここで〈多声的景観〉の暫定的定義を以下のようにしておく。

1.2 〈多声的景観〉(Multivoiced Landscapes) の暫定的定義

本稿では、〈多声的景観〉を、複数の歴史的層、文化的主体、記憶、語りが、同時的かつ通時的に交錯し、それぞれ固有の〈声〉を保持したまま重層的に共存しながら、新たな意味を生成し続ける動態的景観として、暫定的に定義したい。

なおここでいう〈声〉(voice) とは、ある対象の意味やイメージを構築する多様な主体(人間・モノ・記憶・メディアなど)によって形成される言説・視点・価値観を指す概念として位置付ける。これらの〈声〉は、時間的・文化的・感情的に異なる立場から対象(ここでは景観)を再解釈する契機となり、その結果として対象の多層的理解を可能にする。

1.3 多声的景観の理論的特徴

本稿において〈多声的景観〉という概念が強調する特徴は、主として次の三点に整理できる。

第一に、景観を単一の歴史や主体によって説明されるものとしてではなく、複数の歴史的層が重なり合う動的な場として捉える点である。景観は固定的な結果ではなく、異なる時代の営みや記憶が堆積することで形成される歴史的過程の表れである。

第二に、景観形成に関わる多様な主体——先住民、移住者、行政、地域社会、観光者、研究者など——が、それぞれ固有の視点や語りを持つ存在として景観の意味生成に参加している点である。これらの主体は、必ずしも同一の価値観や歴史認識を共有しているわけではないが、相互に影響を及ぼし合いながら同一の空間を共有している。

第三に、そのような複数の声の関係を、単なる並存としてではなく、相互作用の過程として理解する点である。すなわち、多声的景観とは、異なる声が交錯し、ときに衝突し、ときに響き合いながら形成され続ける、開かれた関係的空間として理解される。

このような概念が今日とりわけ重要になるのは、グローバル化や観光活動の拡大、文化遺産政策の進展などにより、景観をめぐる解釈や価値づけがこれまで以上に多様な主体の関

べている。“A plurality of independent and unmerged voices and consciousnesses, a genuine polyphony of fully valid voices is in fact the chief characteristic of Dostoevsky’s novels” (Bakhtin, 1963/1984, p. 6). また、polyphony の本質について、“The essence of polyphony lies precisely in the fact that the voices remain independent and, as such, are combined in a unity of a higher order than in homophony” (Bakhtin, 1963/1984, p. 21). すなわち polyphony とは、複数の声がいかに独立性を保ったまま、従属関係に回収されることなく共存する状態を指す概念である、と述べている。

与のもとで再編されているためである。従来の景観理解がしばしば単一の歴史やナショナルな物語によって説明されてきたのに対し、現代の景観は、複数の歴史、記憶、価値観が交差する場として理解する必要性が高まっている。〈多声的景観〉という概念は、このような状況のもとで、景観に内在する多様な声の関係を読み解くための理論的枠組みを提供するものである。この概念を採用することによって、景観そのものを一義的な意味をもつ対象としてではなく、多様な意味が響き合いながら共存する場として捉える視点を提示するものである。

2. 〈汎対話性〉と多声的景観アプローチ

前節で提示した〈多声的景観〉という概念は、景観を複数の歴史的層と文化的〈声〉の重層として理解するための理論的枠組みである。本章では、この概念を景観分析へと適用するための理論的基盤として、〈対話性〉および〈汎対話性〉の概念を定義するとともに、方法論・分析枠組みとしての〈多声的景観アプローチ〉を提示する。これにより、景観を対話的に理解するための理論的枠組みを明確化する。

2.1 〈多声的景観アプローチ〉

〈多声的景観アプローチ〉(Multivoiced Landscapes Approach)とは、特定の景観を単一の物語としてではなく、複数の歴史的層と多様な文化的〈声〉の重層として読み解くための方法論を指す。本アプローチでは、すべての景観が複数の歴史的層と多様な文化的〈声〉を内包していると考ええる。

さらに、それらを構成する異なる歴史的層や文化的〈声〉、そしてそれらのあいだに生じる対話的可能性に注目し、景観を〈異なる文化集団が意味を交渉し合う声の場〉として捉えることを目的とする。

2.2 多声的景観の構成要素

多声的景観を構成する基本的な要素は、大きく二つに整理できる。

(1) 歴史的な重層性——多時代の〈声〉の共存

景観は、過去から現在に至る複数の時代の〈声〉が時間軸上で重なり合うことによって形成される。したがって、各時代に刻まれた〈声〉を現在の景観の中から読み解くことが求められる。この視点は、景観を単なる物理的空間としてではなく、歴史的記憶の堆積として理解することを可能にする。

(2) 同時代的な多様性——現在を生きる多様な主体の〈声〉

現在においても、景観に関わる多様な主体が、それぞれ異なる視点や解釈を与えてい

る。先住民、地域住民、観光者、国家や自治体、メディアなど、複数の主体が同一の景観に対して異なる意味づけを行う。このような同時代的な〈声〉の多様性を把握し、その相互関係を明らかにすることが重要である。

2.3 〈対話性〉

〈対話性〉(dialogical) という概念は、バフチンの思想において中心的な位置を占める理論的視点である。バフチンは、言語や意味は単一の主体によって完結するものではなく、常に他者との関係の中で生成されると考えた。つまり、〈声〉とは固定的な実体ではなく、その意味もまた、異なる声や立場の相互作用を通して生成され続ける関係的・動態的過程として理解される (Bakhtin, 1963/1984, pp. 110, 252; 2021, pp. 284, 293–294)。このような視点は、文化や空間を単一の意味体系としてではなく、複数の声が相互に関係しながら意味を生成していく開かれた場として理解する理論的基盤を提供する。

こうした対話理論の視点は、その後、人文学や社会科学のさまざまな分野において発展的に継承されてきた。特に文化研究、歴史研究、景観研究などの領域では、文化や空間を複数の主体や記憶が交錯する関係的空間として理解する理論的枠組みとして応用されている。

本稿では、このような理論的背景を踏まえ、歴史的な重層性と同時代的な多様性の双方に見られる多声性を認識し、それらを尊重しつつ活用することによって、景観を単一の物語を主張する場から、異なる文化や立場の〈声〉が交わり、対話と共存が生まれる場へと転換し得るものとして捉える。このような関係性を本稿では〈対話性〉(dialogical) と呼ぶ。

すなわち〈対話性〉とは、異なる主体や歴史的層の〈声〉が相互に関係しながら、新たな意味や理解を生成していく過程を指す概念である。

2.4 〈汎対話性〉

さらに本稿では、この対話的關係を社会的・文化的・地理的境界を越えて拡張する概念として〈汎対話性〉(pan-dialogical) を提示したい。

〈汎対話性〉とは、文化・社会・国境といった既存の境界を超えて、多様な〈声〉が交差し、共鳴する場を開く姿勢を指す概念である。この語は、ギリシャ語の pan (「すべての」「包括的な」) と、バフチン以降の対話理論における dialogical (「対話的な」) を組み合わせた造語であり、トランスナショナルかつトランスカルチュラルな対話を促す理論的視点として位置づけたい。

2.5 理論的含意

〈多声的景観〉の考え方が重視するのは、これらの〈声〉を単一の物語へと統合することではなく、それぞれの〈声〉が対話的に共存するあり方である。すなわち、景観を一つの均質な意味空間としてではなく、複数の視点が交差し、文化的空間の多元性や葛藤を可視化するポリフォニックな場として捉えるためのアプローチである。

さらに、上述した〈汎対話性〉という視点を導入することで、〈多声的景観〉の概念は、文化的・社会的・地理的境界を越えたトランスナショナルかつトランスカルチュラルな対話を促す理論的・実践的枠組みへと拡張し得る。

3. 先行研究の整理

3.1 解釈の複数性と考古学・遺産研究

前章で提示した〈多声的景観〉および〈汎対話性〉の概念は、バフチンが提示した“polyphony”（ポリフォニー＝多声性）の理論（Bakhtin, 1963/1984）を重要な理論的基盤としている。

同時に、本稿の視座は、考古学や遺産研究において、考古資料や文化遺産を単一の意味へと回収するのではなく、複数の解釈や主体の関与を重視する一連の議論——すなわち、1980年代末に展開した“polysemy”（多義性）をめぐる議論（Shanks & Tilley, 1987 など）から、1990年代に展開した“multivocality”（多声性）および reflexive excavation methodology（再帰的発掘方法論）に関する議論（Hodder, 1997 など）——とも接続するものである。

さらに、人類学や民族誌研究において、複数の声や視点を統合する方法論として展開されてきた“multivocality”（多声性）に関する議論（Rodman, 1992 など）とも接続する。

これらに共通しているのは、文化や空間を単一の意味体系としてではなく、多様な主体や解釈が交差する関係的な場として理解しようとする視点である。本稿が提示する〈多声的景観〉もまた、このような多声性をめぐる理論的系譜の延長線上に位置づけられる。

3.2 場所の多声性と多場性——Rodman の multilocality 論

Margaret C. Rodman は、“place” を単なる物理的空間ではなく、「声や時間と同様に、政治化された社会的・文化的構築物 (a politicized social and cultural construct)」(Rodman, 1992: 640) であり、「空間的に構築された複数の意味を持つ (Places have multiple meanings that are constructed spatially)」(Rodman, 1992: 641) と指摘している。そのうえで、“multivocality”（多声性）と“multilocality”（多場性）²の双方に注目することによって、“place” がもつ空間的意味の複雑な社会的構築過程への理解を深める視点を以下のように提示している。

[A] single physical landscape can be multilocal in the sense that it shapes and expresses polysemic meanings of place for different users. This is more accurately a multivocal dimension of place, but multilocality conveys the idea that a single place may be experienced quite differently. (Rodman, 1992: 647)

² 先行研究として、小林聡子（2021）はこの Rodman（1992）を引用する際、“multilocality”に「多場性」という造語を訳として充てており、本稿もこれに依るものとする。

単一の物理的景観であっても、それが異なる利用者に対して多義的 (polysemic) な場所の意味を形成・表現する、という点で、多場的 (multilocal) であり得る。より正確に言えば、これは場所の多声的 (multivocal) 次元であると言えるのだが、多場性 (multilocality) という概念で表現したいのは、同一の場所が主体によって多様な仕方で経験され得る、という考え方である。(Rodman, 1992: 647, 筆者訳、下線筆者)

The social landscape is both context and content, enacted and material. It is the lived world in physical form. It can be radically emic—the social landscape indigenous people (collectively or individually) define through particular experiences or interests. Or it can be an analyst's map [...]. (Rodman, 1992: 650)

社会的景観は、背景であると同時に内容でもあり、行為として実践されるものであると同時に物質的な存在でもある。それは、身体に根ざした生活世界として経験される。この社会的景観は、根本的にエミク (radically emic) なもの——すなわち、先住民が(集団的にも個人的にも) それぞれの経験や関心を通して定義する社会的景観——として理解される場合もあれば、他方で、研究者による地図として把握されることもある (Rodman, 1992: 650, 筆者訳)。

こうした Rodman の視座は、本研究に重要な理論的示唆を与えるものである。そのうえで本研究は、こうした視座を理論的基盤として継承しつつ、landscape そのものを〈異なる文化集団が意味を交渉し合う声の場〉として新たに位置づけ、その理論的發展を試みるものである。

3.3 Cultural Landscape 概念との関係

筆者らが提案する〈多声的景観〉の考え方は、景観を単に美的あるいは生態学的に評価するのではなく、そこに積極的に〈文化的〉な価値を見出そうとするアプローチである。その意味においては、UNESCO が定義する“Cultural Landscape (文化的景観)”³や、日本の文化財保護法における「文化的景観」⁴の概念と共通する視点を有している。

³ ユネスコの第16回世界遺産委員会(1992年)に世界遺産制度に導入された概念。ユネスコの *Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention*, 2025年版では、文化的景観を以下のように定義している。“Cultural landscapes inscribed on the World Heritage List are cultural properties and represent the ‘combined works of nature and of man’ designated in Article 1 of the Convention. They are illustrative of the evolution of human society and settlement over time, under the influence of the physical constraints and/or opportunities presented by their natural environment and of successive social, economic and cultural forces, both external and internal.” (United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, Intergovernmental Committee for the Protection of the World Cultural and Natural Heritage 2025, p.22).

⁴ 日本では、2005年4月1日に施行された改正文化財保護法において、「文化的景観」が新たに文化財の一類型として位置づけられた。同法第2条第1項第5号では、文化的景観を「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことので

ただし、UNESCO の「文化的景観」概念および日本の文化財保護法における「文化的景観」概念は、いずれも特に優れた景観を対象とし、それらを文化遺産・文化財として歴史・建築・産業といった観点から評価・保護する⁵ために定義されたものである。

これに対して、筆者らの〈多声的景観〉は、私たちを取り巻くあらゆる景観に内在する歴史的・文化的多声性を読み解こうとする試みであり、この点において根本的に異なる視座に立っている。つまり、UNESCO や日本の文化財保護法における「文化的景観」という公的アプローチにおいては、評価対象は特定の優れた景観に限られており、その評価軸も限定的である。そのため、私たちを取り巻く多様な景観に潜む文化的・歴史的重層性或多声性を検討するうえでは、これら〈優れたものを登録あるいは選定するための評価軸〉では不十分である。むしろ、こうした既存の評価枠組みからこぼれ落ちる要素を見出し、文化的・歴史的な多声性の潜在的価値を照らし出すことこそが、〈多声的景観〉アプローチの重要な目的となるのである。

4. 景観における多声性研究の展開

これまで、多声性 (polyphony/multivocality) を景観概念へ導入した研究は決して多くない。しかし、今後、筆者らが〈多声的景観〉に関する理論を構築していくうえで、理論的基盤として参照すべき有用な先行研究・先行実践として、以下の三例を取り上げたい。すなわち、“Polyphonic Speculations (多声的思索)”に関する議論、“Polyphonic Landscapes (多声的ランドスケープ)”に関する実践、そして“The Polyphony of Cultural Landscape (文化的景観の多声性)”に関する議論である。

4.1 Polyphonic Speculations——デザイン研究における多声性

一つ目は、デザイン研究 (design research) の領域における“Polyphonic Speculations (多声的思索)”に関する議論である。代表的なものとして、David Philip Green らによる論考 (Green et al., 2024) が挙げられる。Green らは、バフチンによる polyphony の理論に依拠しつつ、“Polyphonic Speculations”を次のように定義している。

Polyphonic Speculations unites two influential concepts — plurality and possibility — [...] could serve as a methodology to collectively engage with complex challenges. [...] [I]t has been conceived as way to frame processes that employ speculative design, dialogue, and reflection among multiple design researchers (Green et al., 2024, p. 1).

ポリフォニック・スペキュレーション (多声的思索) とは、多様性 (plurality) と可能

きないもの」と定義している (文化財保護法 [昭和 25 年法律第 214 号])。

⁵ UNESCO の「文化的景観」は登録、日本の文化財保護法における「文化的景観」は選定。

性 (possibility) という二つの重要な概念を統合したものであり、(中略) 複数のデザイン研究者が、思索的デザイン (speculative design)、対話 (dialogue)、省察 (reflection) を通して、複雑かつ多面的な課題に共同で取り組むための枠組みとして構想されてきた。(筆者訳)

つまり、多様な主体が異なる価値観や視点を持ち寄り、共同で思索を行う——すなわち、多声的思索を行う——ことによって、既存のデザインの枠組みを超えた、より豊かな研究と実践を切り開こうとする概念的枠組みである。この考え方は、筆者らの問題意識とも根底において深く共鳴するものであり、〈多声的景観〉の理論的基盤を形成するうえで、示唆的かつ有用な先行議論として位置づけられる。

4.2 Polyphonic Landscapes——音響的多声性の実践

二つ目は、Zone2Source⁶と、オランダの ArtEZ University of the Arts における Professorship Theory in the Arts⁷が、2023 年にアムステルダムの Amstelpark (アムステルパーク) で共同実施した“Polyphonic Landscapes (多声的ランドスケープ)”プロジェクトである。これは、サウンドアーティストを招聘し、音と聴覚行為を通してランドスケープをより能動的に理解するための新たな方法を模索した実践的プロジェクトである。

同プロジェクトでは、「人間的・非人間的な諸主体が『世界制作 (world-making)』の多声性のうちに絡み合う営み」を「ランドスケープピング」として捉える試みが行われている (Zone2Source, 2023)。つまり、ここでいう polyphony とは、音響的な多声性、すなわち、人間と非人間の主体が織りなすサウンドスケープの重層性を指しており、景観を複数の要素が交錯する重層的存在として把握する点において、示唆的な実践的試みとなっている。

ただし、同プロジェクトが主として着目しているのは音響的多声性であり、筆者らが〈多声的景観アプローチ〉として提唱するような、景観を複数の歴史的層と多様な文化的〈声〉の重層として読み解いていく視座までは展開されていない。

4.3 The Polyphony of Cultural Landscape——文化的景観研究の学際性

三つ目は、景観を学際的に捉えるアプローチとしての多声性である。その代表的成果として挙げられるのが、Chris Wilson と Paul Groth の共編による書籍 *Everyday America: Cultural Landscape Studies after J. B. Jackson* (2003) である。同書は、文化的景観研究に大きな影響を与えた John Brinckerhoff Jackson を再評価しつつ、その後のアメリカ文化的景観研究の学際的展開について整理した論考集である。

同書の序章タイトルは、まさに“The Polyphony of Cultural Landscape (文化的景観の多声

⁶ アムステルダムのアムステルパークに拠点を置く国際的なアート・プラットフォーム。自然・科学・アートを横断する展示や研究プロジェクトを展開する。Zone2Source. (n.d.).

⁷ アルテス芸術大学芸術理論研究拠点 (オランダ)。

性)”であり、Groth と Wilson は次のように述べている。

[C]ultural landscape [...] is a way of thinking—one with inherent contradictions and multiple approaches—that people have readily adapted to new questions and social developments. (Groth and Wilson 2003: 2)

文化的景観とは（中略）一つの思考様式であり——本質的に矛盾を抱え、複数のアプローチを含みつつも——人々が新たな問題や社会的変化に応じて柔軟に用いてきた概念である。（筆者訳、下線筆者）

At the beginning of his formal and informal education, Jackson had found studies of the landscape already in multiple voices and competing schools of thought. His influence was not to create any new, well-defined disciplinary rigor or a single paradigm. Instead, he consciously added still more diversity to the enterprise. (Groth and Wilson 2003: 12-13)

ジャクソンが正規・非正規の教育を受け始めた当初、景観研究にはすでに多様な声と互いに競合する学派が存在していた。彼の影響は、新たに厳密に定義された学問体系や単一のパラダイムを生み出すことにはなかった。むしろ彼は、景観研究という営みに対して、意識的にさらなる多様性を加えたのである。（筆者訳、下線筆者）

このように、同書は文化的景観を多様な学術的アプローチによって「多声的」に捉えるための重要な理論的成果として評価できる。ただし、同書における“The Polyphony of Cultural Landscape（文化的景観の多声性）”とは、学術的な視座やアプローチの多声性、すなわち学際的に文化的景観を捉えることの重要性を指摘するものであり、筆者らが提起するように、あらゆる景観そのものを複数の歴史的層と多様な文化的〈声〉の重層として読み解く視点を具体的に展開しているわけではない。とはいえ、彼らの議論は、景観を歴史的層と文化的〈声〉の重層として捉える本稿のアプローチを、学際的な方法論として再定位するための多くの示唆を含んでおり、有用である。

4.4 〈多声的景観〉の位置づけと独自性

以上見てきたように、近年、“polyphony（多声性）”あるいは“multivocality（多声性）”という概念は、デザイン研究、サウンドアート、文化的景観研究など、多様な領域において、それぞれ異なる形で導入・展開されてきた。これらの先行研究・先行実践はいずれも、単一の視点や価値観へ還元されない、複数の主体の関与や、多様な解釈可能性を重視している点において、筆者らの提示する〈多声的景観〉（Multivoiced Landscapes）および〈汎対話性〉（pan-dialogical）と重要な問題意識を共有している。

具体的には、4.1 で述べた“Polyphonic Speculations”に関する議論は、多様な主体が思索・対話・省察を通して複雑な課題に向き合うための方法論として構想されており、本稿が重視する〈対話性〉および〈汎対話性〉の議論と深く共鳴する。また、4.2 で触れた“Polyphonic Landscapes”の実践は、人間的・非人間的主体が織りなすサウンドスケープの重層性に注目することで、景観を複数の要素が交差する場として捉える視座を提示している。さらに、4.3 の“The Polyphony of Cultural Landscape”に関する議論は、文化的景観研究を単一の学問的パラダイムへ収束させるのではなく、多様な学術的アプローチが共存する学際的領域として理解することの重要性を示している。

しかしながら、これらの議論や実践においては、多声性は主として、学術的方法論の多様性、思索主体の複数性、あるいは感覚的・音響的多層性として論じられており、景観そのものを複数の歴史的層と多様な文化的〈声〉の重層として読み解く視点は、必ずしも十分に展開されているとは言えない。

これに対して、本稿が提唱する〈多声的景観〉は、景観を単なる物理的環境や審美的対象としてではなく、異なる時代、異なる文化集団、異なる社会的立場、さらには異なる記憶や感情が交差し続ける〈対話的空間〉として捉えようとする試みである。そこでは景観は、固定的な意味を持つ完成された対象ではなく、複数の〈声〉が交錯し、ときに衝突し、ときに響き合いながら、不断に意味を生成し続ける開かれた関係的空間として理解される。

さらに筆者らは、こうした景観理解を、単なる理論的読解に留めるのではなく、異文化理解や創造的対話を促進するための実践的枠組みとして位置づけたい。すなわち、景観に内在する多声性を読み解くことは、異なる文化や歴史認識を単一の物語へ回収し、共有可能なナラティブのみを残す作業ではなく、それらの差異を保持したまま共存可能な関係性を模索する行為として、あらためて定義したいのである。その意味において、〈多声的景観〉とは、景観研究のための概念であると同時に、多文化共生やトランスナショナルな対話の可能性を切り開くための〈汎対話的实践〉でもあるのである。

5. 多声的景観の生成——対話実践としての国際共同研究

5.1 屋上から始まる対話——わたしたちの対話論の原点

筆者ら（山村と張）は、大学院博士課程時代の同級生であり、同じ研究科の隣接する研究室に所属していた。当時、博士論文の執筆に行き詰まると、私たちは、私たちの研究室のある建物の屋上へ向かい、そこから東京の都市景観を眺めながら議論を重ねたものである。不思議なことに、あらかじめ約束していたわけでもないのに、互いに行き詰まりを感じるタイミングが重なり、自然と同じ時間に屋上へ向かうことが少なくなかった。

こうした必然とも偶然ともいえる屋上での経験の中で、筆者らはそれぞれの問題意識や仮説を持ち寄り、異なる視点から意見を交わし続けたことを、今でも鮮明に記憶している。

そしてその結果として、個別に抱えていた思考は、対話の中で再構成され、しばしば新たな着想へと展開していった。

最終的に筆者らは同時期に博士論文を提出し、学位を取得するに至ったが、振り返れば、当時は論文執筆からの休憩や雑談のように思っていた、あの屋上での対話こそが、思考を前進させる重要な契機となっていたと強く感じている。

この経験は、対話を単なる意見交換の手段としてではなく、思考そのものを生成する過程として捉える契機となった。すなわち、対話とは既存の考えを伝達するものではなく、異なる視点の提示と、それらの交差によって、新たな意味を生み出す実践なのである。この意味において、屋上での対話は、筆者らにとって研究者としての〈多声性〉の具体的な原体験であり、本稿における対話論の出発点であったのだと思う。

5.2 対話型フィールドワーク——異質な要素の共存による新たな理解体系の形成へ

その後、筆者らは20年以上にわたり国境を越えた共同研究を継続し、中国・日本をはじめ、ロシア、チェコ、ペルー、カナダなど、世界各地を共に歩く機会を得てきた。この過程において重要であったのは、異なる社会的・文化的背景を持つ私たち二人が、同一の場所を共に経験し、その経験を言語化し、対話し続けることであった。

こうした実践は、単なる国際共同研究の方法論にとどまるものではない。実際に筆者らが感じたのは、対話を通して、多様な言語、異なる歴史的文脈、異なる専門分野の知見が交差し、〈対話の場〉そのものが〈多声的交流の場〉へと変化していくということであった。中国語と日本語、さらには地域固有の言語や歴史的語彙、観光学・都市計画・建築といった異なる学問領域の視点、さらにはそれぞれの社会における社会的・文化的背景が、対話の中で重層的に重なり合っていく。

当然のことながら、ここでいう交流には、意見のぶつかり合いも含まれる。そうしたぶつかり合いを通して、互いの価値観や見解の差異が明確となり、その差異を許容し合う理解が形成されていったように思う。重要なのは、こうした差異を対立として処理するのではなく、差異を差異として受け止め、相互に作用させることではないだろうか。異なる言語や価値観を、対話を阻害する要因ではなく、新たな意味生成の契機として機能させること。すなわち、多声的交流とは、異質な要素を共存させることで、それぞれが相互に影響を及ぼしながら、新たな理解体系を形成していく過程であると思うのである。

一般にフィールドワークは、研究者が現地に赴き、観察や聞き取りを通じて対象を理解するための手法として広く用いられてきた。しかし、多くの場合、その過程は研究者個人の視点に依拠しており、複数の主体が互いに影響を及ぼし合いながら理解を形成していく側面については、これまで十分に注目されてこなかった。

これに対し〈対話型フィールドワーク〉は、異なる社会的・文化的背景を持つ複数の主体が、同一の場所を共に経験し、その経験を相互に言語化し、共有するプロセスそのものを重視するアプローチである。そこでは、日本人と中国人である筆者ら二人の対話を核としながら、

さらに多様な地域的・学問的背景を持つ主体との交流が重なり合うことで、多声的理解が生成されていく。すなわち、同じ景観を前にして生じる複数の解釈や感覚の差異を出発点とし、それらを対立としてではなく、多声的な資源として捉えることに特徴がある。

このモデルにおいて重要なのは、参加者間の関係性である。各主体が対等な立場で発言可能な関係性が確保され、他者の見解を否定するのではなく、それを理解し、受け止める姿勢が共有されていることが不可欠である。こうした条件が満たされるとき、フィールドワークは単なるデータ収集の場ではなく、意味が生成される対話的空間へと転換する。

さらに、このプロセスにおいては、言語の差異や文化的背景の違いが重要な役割を果たす。異なる言語、異なる歴史的文脈、異なる専門分野からの視点が交差することで、景観に対する理解は一義的なものではなく、多層的かつ動態的なものとして立ち現れる。このような状況において生成されるのは、単一の結論ではなく、複数の解釈が共存する状態、すなわち〈多声的理解〉である。

その一つの重要な実践例として、麗江における世界遺産と観光をめぐる共同研究（山村・張 2007）が挙げられる。この研究には、筆者らの都市計画・建築分野に加え、民族学、社会学、音楽学、服飾研究など、多様な専門分野の研究者が参加し、現地において対話を重ねた。その結果、麗江の景観や文化的価値は、単一の視点ではなく、多様な視座から重層的に読み解かれることとなった。

筆者らは、このように、同一の場所を共に経験し、その経験を相互に言語化しながら、一対一の対話を通して、多様かつ異質な要素を許容し共存させ、新たな現象理解を生成することを目指す調査実践を、〈対話型フィールドワーク〉と名付けている。

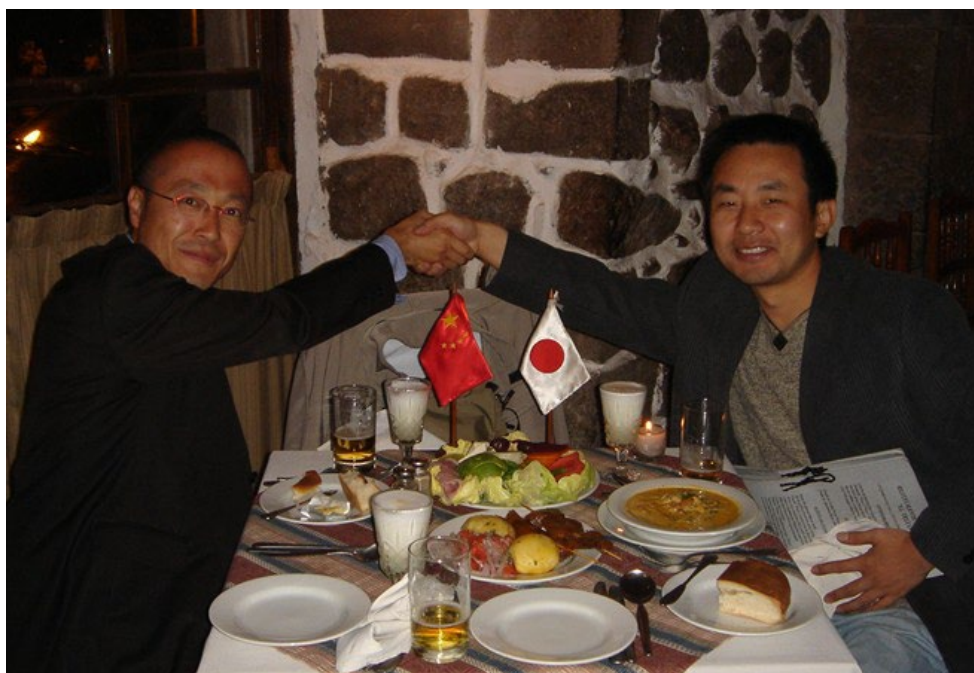


写真1 筆者ら（左：山村高淑、右：張天新）。2005年9月21日、ペルー・クスコにて。



写真2 筆者ら（左：山村高淑、右：張天新）。2025年9月2日、札幌市にて。

5.3 対話空間としての多声的景観——一対一対話の〈網の目構造〉

〈対話型フィールドワーク〉の実践を通じて明らかになるのは、景観に対する理解が、必ずしも一つの統一的な結論へと収束するものではないという点である。むしろ、異なる主体がそれぞれの視点から発した〈声〉が重なり合い、互いに響き合う過程そのものが、景観の意味を構成していると考えるべきであろう。実際には、〈対話型フィールドワーク〉は、現地において多様な主体との関係の中で、より複雑な対話へと展開していく。すなわち、筆者ら（山村と張）のあいだの対話に加え、現地住民や観光関係者、サービス提供者など、異なる立場の人々との交流が加わることで、〈声〉の層はさらに厚みを増していく。

ここで重要なのは、いずれの対話も基本ユニットは一対一の対話であり、それらが複雑に重なり合うことで、一対一の対話による〈網の目構造〉が形成されていく、という点である。このような構造こそが、〈対話型フィールドワーク〉が織りなす〈多声的景観〉なのである。

同一の場所において、歴史的記憶の〈声〉、生活現場の〈声〉、観光客の〈声〉、制度や政策の〈声〉といった複数の〈声〉が交差することで、景観は単一の意味を持つ対象としてではなく、多様な〈声〉が重なり合う場として立ち現れる。この過程において重要なのは、景観が単に観察される対象ではなく、対話の集積によって織り紡がれる存在であるという点

である。

すなわち、景観とは終わりのない〈声〉の集積体なのである。そこでは、異なる主体がそれぞれの経験や知識をもとに語り、その語りが他者によって受け止められ、再び新たな語りを生み出していく。景観は静的な対象ではなく、動態的かつ連鎖的な対話空間なのである。

この意味において、〈多声的景観〉とは、固定された意味を持つ対象ではなく、複数の〈声〉が交錯し続ける動的な場である。そして、そこに残されるのは、一つの確定的な解釈ではなく、異なる〈声〉が交わり、対話し、記憶されていく過程そのもの、すなわち〈声の記憶〉である。

この〈声の記憶〉は、場所の意味を一義的に規定するものではない。むしろ、意味が常に再解釈され、更新され続ける可能性を内包した状態を示すものである。したがって、〈多声的景観アプローチ〉は、景観の意味を固定化することを目的とするのではなく、意味が生成され続ける場として景観を捉え、その生成過程を明らかにすることを目指すものなのである。

5.4 創造的対話を成立させる条件

上述したような気付きは、筆者らに限らず、複数人で現地調査（フィールドワーク）を実施する際にしばしば生じることである。たとえ同じ国籍からなるメンバーであっても、調査参加者はそれぞれ異なる社会的・文化的背景を持ち、異なる価値観や視点を有している。そうした人々が〈ひとつの場所〉で〈同じもの〉を見たとき、当然のことながら異なる反応が生じる。重要なのは、そこで感じたことを率直に発言し、互いに意見を交わすこと、すなわち〈対話〉することなのである。そうすることで、その場に居合わせたメンバーが、それぞれ異なる見解を持っているという事実を初めて認識できる。そして、そうした見解の差異を正誤や優劣としてではなく、違いとしてそのまま認め合い、そのうえで相互に共有可能な事柄を探っていく。これが〈対話型フィールドワーク〉の基本姿勢である。

もちろん、単独でのフィールドワークを否定する意図は一切ない。単独フィールドワークも極めて重要なアプローチである。他者の見解に左右されることがないため、自らの問題意識や独自の視座を見出し、確立するうえで、非常に有効な手法となる。筆者ら（山村も張も）も、本来は単独行動を好む性格であり、単独フィールドワークを好んでいる（共同調査の場合も、必ず自由時間を確保している）。その一方で、異文化対話という観点から言えば、複数メンバーによる〈対話型フィールドワーク〉は、本稿で述べてきたように、大きな意味を持つ。

ただし注意が必要なのは、複数メンバーによる現地での対話を、対立ではなく、相互理解と相互尊重に基づく創造的な方向へ導く必要があるという点である。たとえば、価値観や意見を強要する人物（あるいは、その意見に他のメンバーが絶対的に従ってしまう状況）が一人でも存在すると、創造的な対話の空気は生まれにくい。やはり重要なのは、参加者が共通の目的を共有しつつも、対等な立場で自由に発言でき、互いの意見を否定することなく議論

を進められることである。こうした姿勢を、全メンバーが最低限の条件として共有する必要がある。

高等教育においてフィールドワークの重要性が訴えられて久しいが、フィールドワークにおけるこうした対話型モデルの重要性についての議論は、必ずしも十分でないように思われる。筆者らがこれまでの共同現地調査を通して学んできたのは、まさに〈対話型フィールドワーク〉の重要性であり、創造的な対話を成立させるための関係性の構築なのである。

6. 結語

6.1 多声的景観と汎対話性の可能性

本稿では、〈多声的景観〉(Multivoiced Landscapes) および〈汎対話性〉(pan-dialogical) という二つの概念を軸として、景観を単一の意味体系としてではなく、複数の歴史的層と多様な文化的〈声〉が交差し続ける対話的空間として捉えるための理論的枠組みを提示した。

まず本稿では、バフチンの polyphony (多声性) 理論を理論的基盤としつつ、Rodman による multivocality および multilocality の議論、さらに考古学・遺産研究・文化的景観研究などにおける多声性をめぐる先行研究を整理した。そのうえで、景観を複数の歴史的層と文化的〈声〉の重層として読み解くための方法論として、〈多声的景観アプローチ〉を提示した。

さらに本稿では、筆者らによる 20 年以上にわたる国際共同研究と現地調査の経験を踏まえ、〈対話型フィールドワーク〉という実践的枠組みを提示した。そこでは、異なる社会的・文化的背景を持つ主体が、同一の場所を共に経験し、その経験を相互に言語化しながら対話を重ねていく過程そのものが、新たな景観理解を生成する契機となることを論じた。

本稿が重視したのは、異なる〈声〉を単一の物語へ統合することではない。むしろ重要なのは、それぞれの〈声〉が差異を保持したまま交差し、相互に作用し続けることである。その意味において、〈多声的景観〉とは、固定された意味を持つ対象ではなく、複数の〈声〉が対話を重ねながら、絶えず意味を生成し続ける場なのである。

グローバル化が進展し、社会的・文化的対立が深刻化する現代において、異なる価値観や歴史認識をいかに共存させるかは、極めて重要な課題となっている。本稿で提示した〈多声的景観〉および〈汎対話性〉の視点は、景観研究にとどまらず、異文化理解、観光研究、教育実践、さらにはトランスナショナルな共同研究のあり方を再考するための基盤となり得るだろう。

景観とは、完成された意味の集合ではない。そこには、過去と現在、多様な文化、異なる主体の〈声〉が絶えず交錯し続けている。そして、その〈声〉に耳を傾け、対話を重ねていくことこそが、これからの景観研究に求められる重要な営みなのではないだろうか。

6.2 多声性をめぐる共同研究のこれからに向けて

筆者らは、観光地における歴史的市街地の保護と観光開発が抱える課題について、長年にわたり共同研究を行うなかで、中国・日本をはじめ、世界各地を訪れる機会を得てきた。そうした共同調査旅行を通して、筆者らは、都市空間や集落空間が長い歴史のなかで多様な主体によって形成され、現在に至っていることを肌身で感じるとともに、その歴史的・文化的重層性を景観のなかから読み解いていくことの重要性を強く意識するようになった。

いま振り返れば、そうした〈気付き〉は、国籍や社会文化的背景を異にする、日本人と中国人である筆者ら二人が、旅のなかで同じ景色を眺めながらも、それぞれ異なる視点から意見を交わし続けたことのなかから生まれてきたように思う。重要だったのは、異なる意見が対立の材料として処理するのではなく、異なることそのものを互いに尊重し、その差異を保持したまま対話を重ねていったことである。

筆者らは20年以上にわたり共同研究を継続し、不定期ではあるが、さまざまな地域を共に歩き続けてきた。その過程で、「景観を多声的に読み解くことは異文化理解の契機となり得るのではないか」「景観とは単なる保存対象や研究対象であるだけではなく、むしろ対話の舞台なのではないか」「重要なのは、多様な見解や異なる意見を、分断の契機ではなく交流の源泉へと転換することなのではないか」——そうした問題意識を共有するようになっていった。

今回、本稿をまとめるにあたり、あらためてこれまでの歩みを振り返ると、筆者らは一貫して〈多声性〉をめぐる問題意識を共同研究の中心に据え続けてきたのだと気づかされる。

こうして四半世紀近くにわたり、国境を越えて共同研究を継続できる友人を得られたことは、研究者としてのみならず、人生においても、きわめて幸運なことであったと、お互いあらためて感じている。

参考文献

- Bakhtin, M. M. (1984). *Problems of Dostoevsky's poetics* (C. Emerson, Trans.). University of Minnesota Press. (Original work published 1963)
- Bakhtin, M. M. (2021). *The dialogic imagination: Four essays* (C. Emerson & M. Holquist, Trans.). University of Texas Press.
- Green, D. P., Bofylatos, S., Dore, M., & Ranner, V. (2024). *Polyphonic speculations*. DRS Biennial Conference Series, DRS2024: Boston. DRS Digital Library. Retrieved October 16, 2025, from <https://dl.designresearchsociety.org/cgi/viewcontent.cgi?article=3532&context=drs-conference-papers>
- Groth, P., & Wilson, C. (2003). The polyphony of cultural landscape. In C. Wilson & P. Groth (Eds.), *Everyday America: Cultural landscape studies after J. B. Jackson* (pp. 1–22). University of

- California Press.
- Hodder, I. (1997). Always momentary, fluid and flexible: Towards a reflexive excavation methodology. *Antiquity*, 71(273), 691–700. <https://doi.org/10.1017/S0003598X00085410>
- Rodman, M. C. (1992). Empowering place: Multilocality and multivocality. *American Anthropologist*, 94(3), 640–656.
- Shanks, M., & Tilley, C. (1987). *Social theory and archaeology*. Polity Press.
- United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, Intergovernmental Committee for the Protection of the World Cultural and Natural Heritage. (2025). *Operational guidelines for the implementation of the World Heritage Convention* (WHC.25/01, 16 July 2025). UNESCO World Heritage Centre. Retrieved March 12, 2026, from <https://whc.unesco.org/en/guidelines/>
- Zone2Source. (2023). *Exhibition Polyphonic Landscapes: Ongoing research on sound and ecology*. Zone2Source. Retrieved September 30, 2025, from <https://zone2source.net/en/tentoonstelling/polyphonic-landscapes-2/>
- Zone2Source. (n.d.). *About Zone2Source*. Zone2Source. Retrieved September 30, 2025, from <https://zone2source.net/en/about-zone2source/>
- 小林聡子 (2021) 「Transvocality と Translocality——カテゴリーをめぐる相互行為的分析」『異文化間教育』53, 107–124.
- 文化財保護法〔昭和 25 年法律第 214 号〕. e-Gov 法令検索. Retrieved March 12, 2026, from <https://laws.e-gov.go.jp/law/325AC0100000214>
- 山村高淑・張天新・藤木庸介 (2007) 『世界遺産と地域振興——中国雲南省・麗江に暮らす』世界思想社.



© 2026 Takayoshi Yamamura & Tianxin Zhang

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.

本稿は Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License (CC BY-NC-ND 4.0) の下で公開されています。